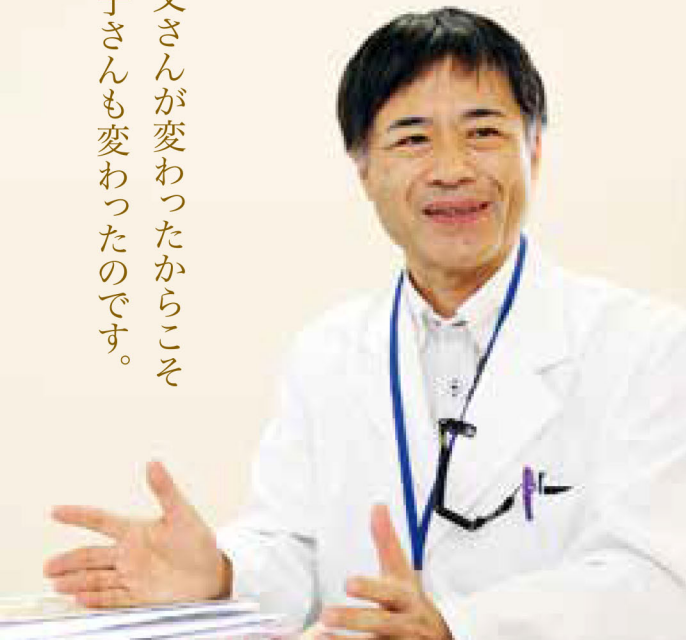


お父さんが変わったからこそ
息子さんも変わったのです。



大月 それは私もすごく感じますね。たとえば作業療法士や薬剤師は、患者さんのご家族と接する機会自体が少ないですから、そういう機会をもつことが成長の糧になります。

村井 家族教室を開くことが直接病院の利益につながるわけではないですが、長い目で見れば、当院の医療の質を高めるために大きく寄与していると思います。

Q 「高E」だった家族が、家族教室を通じて「低E」に変わっていく事例も多いですか？

村井 それはもう、枚挙にいとまがないほどあります。

私が家族教室を担当していたときの印象深い例を挙げます。統合失調症の息子さんをもつ父親から、こう言われたんです。「最近、息子がえろう優しくなつたんですわ。先生、お薬変えはつたんですか？」と……。でも、薬は同じでした。それで、あとで当の息子さんに話を聞いたら、「最近、親父が僕にガミガミ言わんようになって、家でもラクなんですわ」と言うんです

(笑)。つまり、その

お父さんは家族教室を通じて、息子さんとの適度な距離の保ち方を学んだわけですね。お父さんが変わったからこそ、息子さんも変わったのです。

Q まさに、「家族の力が薬よりも強い」ことを示す典型的事例ですね。

大月 そうですね。

また、家族同士のつながりが大きな力になることもよくあります。家族教室などで、あるご家族が患者さんについての悩みを話した時、別のご家族が「我が家でも同じようなことがあつたけどこうすることで解決したよ」という話をしてくれたらそのアドバイスは我々医師の言葉よりもずっとリアルで重いと思うんです。家族に患者がいる人にしかわからない気持ちもありますから……。

Q なるほど。ほかのご家族の姿からも多くのことが学べるわけですね。

村井 精神疾患の治療において、ご家族は医療チームの一員でもありと私は考えています。ご家族が「チーム」に溶け込んでくれたときにこそ目覚ましい治療効果が上がるのです。

ありがとうございました。



取材と原稿／前原政之(まえはらまさゆき)

1964年 栃木県生まれ。1年のみの編プロ勤務を経て、87年 23歳でフリーに。ライター歴28年。



精神疾患の治療において、
ご家族は医療チームの一員です。

家族教室スタッフ



「家族教室」の様子

